

児童文学の展望

一 反長

児童文学の展望

二反長 半 著



■ 大阪教育図書刊 ■

児童文学の展望

昭和五十二年八月一日印刷

昭和五十二年八月十日発行

定価〃二〇〇〇円

著者〃二反長 半

発行者〃横山 実

発行所〃大阪教育図書株式会社

東京都千代田区神田錦町三ノ一七

大阪市東住吉区田辺西ノ町六ノ四

振替東京五一〇四六・電話二九四―二八四八

振替大阪二一五〇〇・電話六二八―四七八一

印刷所〃岩岡印刷株式会社

製本所〃堀越製本工場

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

児童文学の展望・目次

1 児童文学の風土Ⅱその美しい開花への歩みⅡ

花には根がある――9

第1章 明治の少年少女――12

一、くらしとよみもの――12

二、小学校でできる――14

三、小波の文学――17

四、ふたたび小波について――24

五、それ兵隊さんだ――34

第2章 明治の前期児童雑誌――37

一、初期の雑誌――37

二、『少年園』について――46

第3章 明治の後期児童雑誌――56

一、後期の雑誌――56

二、明治少女と雑誌――68

第4章 過渡期の少年少女文学 — 81

一、児童文学その前夜 — 81

二、童話童謡の運動 — 93

第5章 大正と昭和初期 — 107

一、「赤い鳥」の内容外観 — 107

二、続「赤い鳥」について — 119

2 戦時児童文学私見

どうして私は児童文学をやるようになったか — 135

自慢にならぬ自慢 — 152

三つの文学の中で — 160

『少年文芸懇話会』でできる — 165

非常時色強くなる — 175

過渡期の苦悩 — 182

続過渡期の苦悩 — 195

この本について―― 198

日本の童話ということ―― 204

日本の童話に就て――小川未明と一問一答―― 210

日本少国民文化協会―― 218

文学部会と児童文学者―― 236

文学部会報告会―― 239

児童出版界―― 250

終戦時のありさま―― 264

3 戦後児童文学の感想

(一) プロローグ―― 269

(二) 児童文学の問題―― 279

問題の少年文芸―― 279

児童文学の前進―― 282

明日の児童文学へ―― 285

一九六〇年代のセキバク | 289

童話作家の野心 | 293

青空はのぞくだろうか | 301

児童文学：その実作者のいつわらざるいくつかの実感 | 314

児童文学の現代性 | 324

少年文学作家の課題 | 328

児童文学の現状と問題点 | 334

最近の児童文学の動向 | 339

児童文学とその周辺 | 345

成人文学と児童文学 《川端康成の姿勢にふれて》 | 345

愛・石森延男の人 | 363

川端先生と私 | 371

民話についての一私観 | 386

日本の民話あれこれ | 403

(三)

ツバメは土食うて―― 414

少年小説の書き方―― 419

戦後の児童文学―― 447

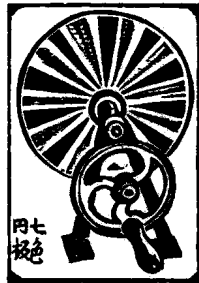
*

生きている史的断面・石森延男―― 454

1

児童文学の風土

|| その美しい開花への歩み ||



花には根がある

日本で、児童文学という近代文学としてのジャンルが生まれてから、まだ日があさい。明治期になって、はじめて、児童文学らしいものがあらわれたといえる。それも明治十八年（一八八五年）に、坪内逍遙が、「小説神随」という、写実文学論を発表し、児童文学のみでなく、文学全般に、はじめて明治文学というものを、はっきりとうち出しはじめてからのことである。

と見てくると、児童文学の歴史は、私の生まれた明治四十年（一九〇七年）よりさかのぼること、そう遠くはない。そこで、私は考えた。日本の児童文学史、日本少年文学史というようなものが、もし私の見てきた日本、私の経てきた社会生活、また、私の行ってきた児童生活などの、生きている歴史の上に、浮きぼりされたもので

あれば、そこには、いわゆる児童文学史とはちがった、生きている立体的な児童文学史が、構成されはしないか、と、そう思ったのである。というわけで、その意図視点から、明治大正の児童文学史「児童文学の風土」を綴っていきたいと思う。

だから、ときには、一見、児童文学とは何ら関係もないような社会事情や、生活記のようなもの、とんでもない文献をひっぱり出してくることがあるかもしれない。しかし、それらも児童文学が、今日に来るまでの根としての一つの役割を果たしたものであることを知っていただきたいのだ。花には根がある。そして、この根をほり起すことこそ正統な児童文学史をうちたてるための、実験的ではあるが、しんけんな方法論と私は考えているのだ。

したがって、文章も、評論とか、随想とかいう、制約にとらわれない。適宜に、自由、さまざまな表現で、わかりやすく読み通していただける方法でいく。前書きが長くなったが、さっそく本文には

ゐることにしよう。

第1章 明治の少年少女

一、くらしとよみの

『あの子、どこの子、堤灯屋のままっ子。あがつてあそべ。茶碗のかけで、頭こつきりことはってやれ』

これは、多く山陽道の子どもたちが、うたった歌である。いわゆるわらべ歌で、地方色ふんぷんとして、まことにおもしろい。しかし、その中の一言一言をかみしめてみると、おそろしさが身をしめつける。こうした、遊び歌、はずむ手まりの歌にも、まま母、まま子の問題が、ありふれた、日常の事態として、おおっぴらに、歌われていたからだ。なにか、ままっ子というものが、罪悪者でもあるかのような感じを、平然と歌っている。

かと思うと、明治の子どもは、いつも『人さらい』という恐怖にとらわれていた。戦後のゆうかい事件のように親からの金を目あてにしたものとは違い、同じ金でも、その、さらった子を売り飛ばして得る金のことである。そして、この『人さらい』は、わたしの郷里である摂津（大阪）にもそのままあって、それらの悪人を、『子とり』と呼んでいた。おそろしくて、人間とは思えず、かれらを、わたしらは、狐のようにシッポのある悪魔にちがいないと思っていた。おとなを、りっぱな人格者と思っている明治の少年少女には、人間が、そのような悪魔的な行為をするとは、考えただけでも、身ぶるいすることだったのだ。

ともかく、こうして「文明開化」の思潮風俗が、押しよせていた明治とはいえ、子どもの世界では、まだまだ江戸時代の考え方、行動が、つよくおしつけられていて、その底にある、勸善懲惡の精神こそ、正しいものの第一等として、存在していたのである。

明治になるまでの江戸時代の子どもの読物には、草双紙、絵草紙とよばれる本があつて、これには『日本五大噺』といわれる『桃太郎』『かちかち山』『さるかに合戦』『花さかじい』『舌切雀』『一寸法師』などが、今の絵物語式の構成で一冊の本にまとめられていた。が、これらの話のモチーフは、そもそも勧善懲悪そのものずばりであり、これらのほかに児童読物をもとめることはむづかかった。江戸三百年の風潮は維新になったとはいえ、その底辺では、そう簡単にかわるものではなかったのである。

これは、児童文学史だけの問題ではなく、社会史——また、人間心理、児童心理の問題としても研究されねばならないのである。

二、小学校でできる

ともかく、明治は、文化史的にみて、いちおう封建社会が解体して、新しい資本主義社会に生まれ変わる革命期であつた。